

「被害者だけが許すことができる」～ベルリンのメモリアル・デーから

梶村道子(ベルリン・女の会)

ブランデンブルク門前でのメモリアル・デーも今年で6度目です。毎年この場所に立つと、人が自分に直接関わりのない事象にも決して無関心でないことに元気づけられます。通行人の多くは休暇を楽しむ観光客ですが、サバイバーの写真と解説を丁寧に読んで、被害者を紹介するチラシを求めてきます。「この問題、私の国でも知られてます」とフランスから来た女性。「去年も貰ったよ」と更新版のチラシを持っていくのは、勤め帰りのドイツ人でしょう。「慰安婦」犯罪の事実が、広まり、記憶されていることを実感する瞬間です。



日本大使館(後方右の建物)に公開書簡を提出。なぜかセキュリティチェックが厳重で、入館時に靴までスキャンされた。公開書簡(英文)やメモリアル・デーの写真報告は、facebookの「日本語deトーク」をご覧ください。(撮影:矢嶋幸)

「口外無用」を繰り返す大使館

それに比べ、問題を「終わった」として、隠すことに汲々とする日本政府ときたら、どうでしょう。同じ日、私たちは、安倍首相宛での公開書簡を渡しに日本大使館に出向きました。コリア協会、フィリピンの女性団体ガブリエラのドイツ支部、プロテスタント教会東アジア伝道会、女性人権団体のテレ・デ・ファム、アジアハウス財団と、女の会を除けば全員が他国のNGOの代表ですが、その彼らを前にした大使館員の開口一番が、「書簡を届けたことも含め、対外公表しないでほしい」でした。「公務員が市民に対して『口外無用』? 外交官が、居並ぶ他国のNGOの前で?」と驚く世界の常識は、安倍政権には通じません。何を言おうが「東京からの指示」を繰り返す対応者が、気の毒でした。そして、予想していたことですが、1時間に及んだ面談で、政務担当書記官が再三繰り返したもう一つのポイントが、「日本政府の立場=『日韓合意』」です。この日も「日韓合意」を根拠に、「平和の碑」建設への日本政府の介入やマニラの碑の撤去が正当化され、他の被害国の被害者が排除されました。ひたすら「合意ありき」で、議論が成り立たちません。

許しは謝罪の前提ではない

さて話が首相の「謝罪」に及んだとき。東アジア伝道会のロスタルスキー副代表が書記官氏を遮って言いました。「自分で自分の罪を許すことはできません」。「えっ?…」と聞き返す書記官氏に、ロスタルスキー氏は、子ども同士の喧嘩を引き合いに、謝っても、即、許されるわけではない、許すことができるのは被害者であり、被害者が謝罪を受け入れてはじめて許される、謝罪とはあくまでも被害者に許しを請うことなのだ、と続けました。

ドイツの連邦政治教育センターが「償いと正義」と題する冊子を発行しています。その中の「国際政治における謝罪と和解」という論文に、「政治における謝罪とは、政治的な罪を集団として改悔するとの表明」で、「集団が負っている罪を認め、責任を認識し、無条件に許しを請うこと

だ。たとえ許しが不可能にみえても」との一節があります。そして、謝罪は被害者が許すか、少なくとも被害者が受け入れることで、すなわち被害者に届くことにより、はじめて和解につながりうる、と。ロスタルスキー氏は個人の間での謝罪を語りながら、実は、国際政治における謝罪についてドイツ社会が到達した地平を伝えようとしているのです。その際問われているのが、「報われない可能性を承知の上で許しを請うこと、許されることを謝罪という行為の前提においてはならない」という謝罪の真摯さです。

1999年末に強制労働者への補償に関して合意が成立したことを受けたラウ大統領の短い演説は、まさにそのようなものでした。被害者が被った苦痛と不正義は金銭では償えない、苦痛が苦痛として認められ、彼らに対してなされたのが不正義だったと明言されることを被害者は欲していると、平易な言葉で述べた後、大統領はすべての被害者に向けて、「ドイツ国民の名において許しを請います。あなたたちの苦痛を私たちは忘れないでしょう」と未来形で結んでいます。「許し」は、「今」ではなく後世に託されたのです。



ブランデンブルク門前でメッセージを読む「ヤジディ教徒女性評議会」のニコさん。(撮影:矢嶋幸)

さて、「戦争と紛争時の性暴力を止めよう、世界中で!」と呼びかけた今年のメモリアル・デーでは、韓国でロウソク革命を経験した女性たちが、移民系のフェミニスト連合と提携して一翼を担いました。韓国女性が日本軍「慰安婦」問題の現状を報告し、ヤジディ教徒女性評議会が今も続くISの性奴隷被害を語り、ドイツ最大の女性の権利擁護団体テレ・デ・ファムとならんで、移民系フェミニスト連合がメッセージを読み上げます。日本軍性奴隷制と現在の性暴力をつなげた2000年女性国際戦犯法廷を想いつつ、広場に立った2時間でした。